いわての NPO・ボランティア活動情報誌

2025 vol.2

ぱいん PIN

Paper Iwate NPO

NPOのはじめの一歩

「NPOの専門性」

- 連携事例集「NPO×教育機関」「NPO×企業」
- 岩手県からのお知らせ
- 岩手県社会福祉協議会／ボランティア・市民活動センターからのお知らせ
- ユース世代に聴いてみよう

環境カウンセラーによる講演
冬の窓の断熱対策：
ビニールカーテンを紹介

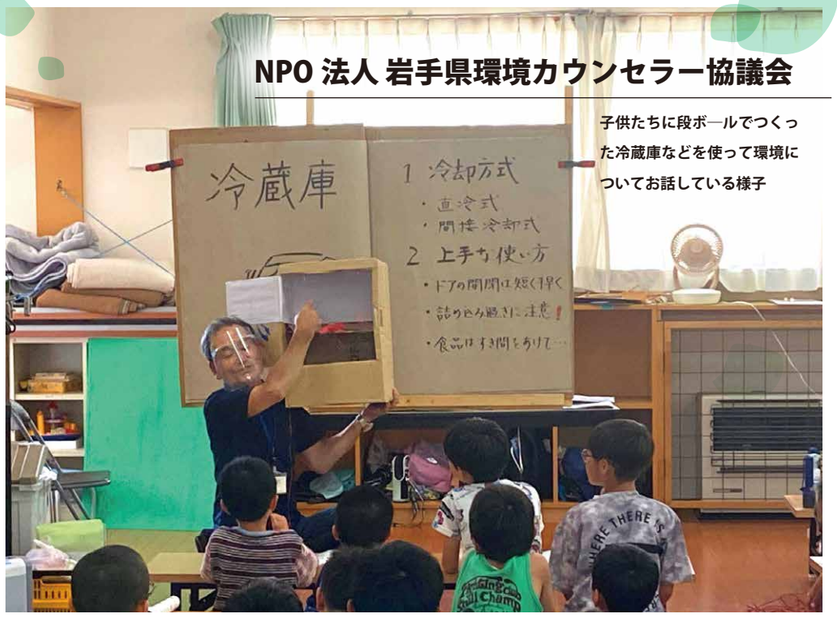
特集

はじめの一歩！「NPOの専門性」

start !

様々な分野やテーマで活動・活躍している岩手県内のNPO。分野に限らず特定の専門性をもつ団体もありますのでご紹介します！

NPO 法人 岩手県環境カウンセラー協議会



子供たちに段ボールでつくった冷蔵庫などを使って環境についてお話している様子

NPO法人岩手県環境カウンセラー協議会は、県内の環境カウンセラー登録者の会として1999年に発足し2001年に法人化、いわて環境塾の受託運営や環境カウンセラー利活用の広報活動など様々取り組んでいます。理事長の林俊春さんと会員の高橋功さんにお話を伺いました。

環境カウンセラーとは？

環境カウンセラーとは環境省が実施している登録制度で、環境保全に関する豊富な経験や専門的知識を基に、市民・NGO・事業者などの行う環境保全活動への助言などを行う方々です。

平成8年から毎年公募と審査が行われ、事業者部門（主に企業、事業者などへの助言を対象）と市民部門（主に地域・学校など、市民への助言を対象）で、それぞれ一定の基準を満たした方を環境大臣が環境カウンセラーとして認定・登録しています。

"環境"のイメージの変化

1999年に有志で会を発足した当時、東北に環境に特化した団体はなく、環境と言えばゴミ問題やリサイクル促進というイメージだったそうです。約30年の間に、社会の変化とともに関心は地球温暖化や生物多様性へと移行してきました。近年は世界的な気候変動も顕著で、事業者は環境への配慮だけでなく熱中症など従業員への対応も必要になり、また、地域でも熊や野生動物との共存への知識や対策も求められています。

岩手県環境カウンセラー協議会の会員もそれぞれが「身近な環境の専門家」として活動する意欲が求められ様々に取り組んできました。

企業を支える専門家として

林さんは、環境に関する機械開発の仕事をしていたことから活動を始め、事業部門の環境カウンセラーに認定された後は東北6県の企業の環境マネジメントシステムへの審査や助言などを行ってきました。環境カウンセラーの認知度は少しずつ広がっているものの、実は人数は減少しているそうです。

「定年が55歳だった時代には、仕事で環境に携わった人たちが定年後に専門性を活かせる一つだったが、これからは、若い世代も参加しやすくしてカウンセラー認定に挑戦する人を増やしていきたい。カウンセラーは知識や主体的に取り組むことが求められるが、全国のネットワークもあり最新の情報や専門知識を得ながら取り組んでいくことができる」と感じているそうです。

"ダンボールの功"が生み出すワクワク

元々電気屋さんだった高橋功さんは、エネルギーに関する知識を活かして地域貢献できないかと考え、岩手県地球温暖化防止活動推進センターの派遣講師としての活動を経て、市民部門の環境カウンセラーに認定されました。ダンボールなど身近な材料でつくった教材を使って、温暖化対策を推進するための省エネ・再エネを体感する環境教室を県内各地で行っており、何でもダンボールで教材や模型をつくるので「ダンボールの功」と呼ばれているそうです。

「やりがいは、環境教室などで話をすると、子どもから大人まで様々な気付きとワクワクして目が輝く機会に出会うことです。自分自身がワクワクしないとできないので、分かりやすく伝えるための教材づくりも工夫の一つです」と話してくれました。

受賞が示す取組の広がり

2023年度には、法人として環境カウンセラー環境保全活動の地域特別貢献賞、高橋功さんは環境大臣賞を受賞しています。環境への関心やイメージは個人のライフスタイルや状況に応じて異なるものの、企業活動や一人ひとりの生活にも密接に関わっている現在、カウンセラーのみなさんは環境の取組に関する伝道師だと感じました。

興味を持った方はぜひ深堀りしてみてください！

チップボイラー見学

水力発電の様子を紹介

大学生対象の環境レクチャー

イオンモール盛岡南での展示

環境省 環境カウンセラー環境保全活動の受賞歴も

子供にもわかりやすい！

活動の詳細はＳＮＳやホームページでチェック！

NPO法人岩手県環境カウンセラー協議会

hayashi9627@h9.dion.ne.jp
0198-24-9627

HP

NPO活動交流センターこう使おう！

ボランティア情報

NPO活動交流センターが情報スペースやHPで行っている情報発信の中で、今まで以上にボランティア情報に力を入れていきたいと考えています。

NPO法人や市民活動団体の活動や地域イベント等でボランティア募集の発信にぜひご利用ください。

＼ボランティア情報のページ／

NPO活動交流センター
TEL：019-606-1760
MAIL：n-katsu@aiina.jp

岩手県 NPO 活動交流センター サイト→

連携事例集

Case study

地域課題の解決や社会貢献のための様々な活動について、NPO 単独で行うのではなく、企業や行政と連携・協働することで新たな成果が生まれています。岩手県内のそんな事例をご紹介します。

事例1 共に生きる学びをつくる

NPO× 教育機関

NPO 法人 miraito（ミライト）

学校法人カナン学園三愛学舎

NPO法人 miraito は、2025年4月から学校法人カナン学園三愛学舎の Re＋（レタス）プロジェクトや総合探究の事業を受託し、理事長上田彩果さんと副理事長川島レラさんを中心に携わっています。

両者の出会いは2025年1月。miraito が法人設立前から岩手町に開設している、10代のための第3の居場所「ユースセンターミライト」を利用していた中学生との縁で、川島さんが一戸町奥中山に校舎を持つ三愛学舎を訪問しました。本人曰くほぼ「飛び込み」の訪問でしたが、その場で、三愛学舎事務長の箱﨑浩二さんから「一緒にやりましょう」との言葉をもらいました。

ユースセンターミライトは、高校生の、正解のない問題に向き合いアクションすることで学ぶ「マイプロジェクト」のサポートを目指していましたが、利用者には知的障がいなど特性を持つ子ども達も多く、課題を感じていました。一方、三愛学舎は岩手県内唯一の私立特別支援学校として盛岡や二戸圏域から生徒を受け入れる中で、学校のオリジナリティや地域にひらく学校である必要性を感じ、2年前から地域と一緒につくる学びの事業の設計を進めていました。事業開始に向けて地域で共に取り組める相手を探していた箱﨑さんは、ミライトの取組を聞いた時に「まさにやっていきたいことを実践していた」と感じたそうです。

探究学習の授業を週2回担当する川島さんは「他校でも探究学習など実践していますが、三愛学舎での授業は子ども達とのコミュニケーションや思いを引き出すことが難しく毎回冷や汗ものです。でも、彼らなりの探究って何だろう?と、教える側が悩み続けることにも意味があると思います。それは、特性の有無に関係なく不登校やミライトに来る子どもたちへの対応にも還元できると感じています」と、話してくれました。

今年度、中学の時にミライトを利用していた子が三愛学舎に入学し、他の子たちよりスムーズに高校生活をスタートさせ、クラスにも良い影響を与えているそうです。箱﨑さんは「こうした流れは学舎全体への良い影響にもなるし、生徒に限らず教職員もこれまでなかったつながりを得て可能性を広げている」とも感じているそうです。

Re＋（レタス）プロジェクトとは

2025年度から三愛学舎で開始した学びを通して共に地域の未来を創る取組のひとつ。地域を応援し地域からも応援されることも目指し、カリキュラム設計をmiraitoや岩手大学が担っています。地域の魅力を見つめ直し「Re」、新しいアプローチを加える「＋（足す）」、更に奥中山の特産物であるレタスをかけて命名。現在、奥中山地域の野菜農家と協力し学習を進めています。

NPO法人 miraito

2020年から県北でキャリア教育事業を開始し、2023年岩手町に「ユースセンターミライト」をオープン。2025年に法人化。子どもや若者が自分らしく生きるための居場所づくりや人材育成を行っている。

HP

学校法人カナン学園三愛学舎

一戸町奥中山に1978年に開校した私立の特別支援学校。知的障がい等のある生徒が学ぶ高等部単置校で、本科3年と専攻科2年の青年期教育を行っている。

HP

事例2 生きがいを一緒に育てる

NPO× 企業

スローレジ

スロー
ショッピング号

NPO 法人やまぼうしネットワーク

株式会社マイヤ　岩手ダイハツ販売株式会社

NPO法人やまぼうしネットワークは、認知症当事者や家族を支える活動としてスローショッピングに取り組んでいます。理事長の紺野敏昭さんは滝沢市でクリニックを開業している認知症専門医です。長年当事者や家族と関わる中で、認知症になると買い物行動を自ら止めてしまったり、禁じられることで自信、意欲、存在意義を失って閉じこもりがちになってしまう人が少なくないことを知りました。そこで、スーパーでの買い物を通じて、求める商品を自分で選択し決める喜び、自立心や尊厳の回復につなげたいと構想を練り、2019年3月に株式会社マイヤに協力をお願いし、快諾を得て「認知症になってもやさしいスーパー・プロジェクト」として準備を始めました。

「当時、全国でも前例がなく社会福祉協議会や地域包括支援センター、認知症の人と家族の会を交えた打ち合わせを10回程重ねて、紺野さんが提案するアウトラインにみんなで具体案を肉付けしていきました」と語るのは、株式会社マイヤ取締役の辻野晃寛さんです。一過性ではなく継続した取組にするためには、それぞれが小さな負担でできる形が重要でした。辻野さんはまた、認知症サポーター養成講座の店内イートインスペースでの開催も提案・実現しました。スローレジ（優先レジ）を設置することや、普段でも従業員が認知症のお客様に対応できるように会社として学べる機会を設けたいとの思いがあったそうです。同年7月にマイヤ滝沢店でスローショッピングを開始し、滝沢店では従業員全員が認知症サポーター養成講座を受講、現在はマイヤグループで2割の従業員が認知症サポーターとなっているそうです。また、売り場の案内表示の改善やショッピング用カートに売り場案内図を取り付けるなど工夫も進めてきました。

2023年に市民が主体となって活動することをめざしてNPO法人化しました。また、現在までに岩手ダイハツ販売株式会社から2台の車両貸与を受け、スローショッピング号として参加者への生活支援で活躍しています。法人理事の櫻野正之さんは、認知症であった奥様がスローショッピングに5年間休まず参加され「ボランティアの方々との交流もあり笑顔が増えて穏やかに過ごせていた」と話してくれました。

ボランティアのみなさん

スローショッピングとは

認知症当事者や高齢者などが、ゆっくり安心して買物を楽しめるようにするための取組。やまぼうしネットワークが行う取組では、認知症サポーター養成講座を受けた方々がボランティアで買物パートナー（オレンジのバンダナが目印）となり会話しながらサポート。会計はスローレジ（優先レジ）で本人のペースでゆっくり支払いができます。現在、滝沢市、盛岡市、陸前高田市、宮古市などで実施され、全国へ広がる取組となっています。

特定非営利活動法人 やまぼうしネットワーク

認知症等の方が住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるまちづくりを目指し、当事者や家族・介護者への生活支援、支える人や医療との連携、地域への啓発活動も行う。

HP

株式会社マイヤ

岩手ダイハツ